

取り組みは更に継続発展させる必要があると思う。農業思想の先達はここに取り上げられた4人だけではなく、また日本にこだわらなければ世界には更に数多くの先達があり、それらの思想が今でも世界の農業を牽引していると考えられる。本シリーズにそのような内容的な発展を期待してこの書評を終えたい。

注1) 有機農業研究 (2010) Vol.2, No.2 p8~17

【書評】

蔦谷栄一 著

『農的社会をひらく』

(創森社, 2016年, 256頁)

岩石真嗣

Shinji IWAISHI

(公財)自然農法国際研究開発センター

本書は、農水省が定める有機農業の推進施策にむけて第2期基本方針案策定のため開催された「有機農業の推進に関する小委員会」において、座長を務めた蔦谷栄一さんの著書である。有機農業が普及する先に待つ、これからの社会と農業と暮らしのあり方を提言する。氏のライフワークとも呼ぶべき研究を踏まえた、日本の未来像を示す作品となっている。

蔦谷さんは1948年に宮城県で生まれ、東北大学経済学部を卒業後、71年から農林中央金庫に勤務し、農林中金総合研究所に移ってから農政に関する数多くの提言をまとめた。有機農業推進法成立の過程においても強い影響を与えたオピニオンリーダーの一人といえる。現在は、「農的社会デザイン研究所」の看板を掲げて、本書のタイトルにある「農的社会をひらく」ことを目標にした活動を続けており、週末には山梨市牧丘町で農的体験学習など自然農法を楽しむ暮らしを続けている。蔦谷さんが当学会の役員を務めた時期に、数名の学会員がその牧丘町の別荘に泊めていただき、ウクレレの演奏を聴かせてもらったことがある。その時のことを思い出して、本書を題材としたセミナーを開いて、蔦谷さんから直接、時間をかけて本書のタイトルの意図を伺った。本書の価値はタイトルにこめられた意図につきる。

社会科学系の理解に明るくない評者が、論評するのはおこがましいことではあるが、この『農的社会をひらく』は、誰でも読みやすく平易な内容で綴られている。評者の自然農法の技術研究は、どちらかといえば

自然科学系に類するが、その感覚で、社会科学系の蔦谷さんの論説は自然農法の社会科学的なアプローチには大いに参考になり、親しみが持てる。経済学や社会学で当たり前の言葉の理解があると、本書はより読みやすいものだろうと思った。更に著者の意図を正確に理解するために、使われている用語の背景、つまり、蔦谷さんがこれまで発言してきた論説についてのある程度の前知識が必要である。そして、このことは科学的農業研究が必然的に陥りやすい、専門化して追究した事実から得られたことが、総合化した農業にはそのままでは役に立たないといった問題とも重なってくる。有機農業学会に限らず、立場の違う多様な発言や発想を理解する場面においては、ひととき強く感じられることである。それは農業生産と研究という仕事の目的意識の違いや、自然科学系と社会科学系に二分される専門性の持つ感覚の違いによるものかもしれない。専門家にとって当たり前の事は、省略された時に、素人にとっては大事な意味を掴み損ねたり、議論がすれ違う原因にもなる。

本書では、著者がそれまでの論考で苦心して主張してきた論説の重複をできるだけ避けて、結論をあっさり示した部分が多くある。特に、現在の活動を表す「農的社会デザイン研究所」の名称を簡潔に別の言葉に置き換えて説明することは難しいことだと蔦谷さんはいう。本書で提示しなかった言葉を借りれば、読者は「農」と「農業」の世界を分けて考えることによって、次の時代に目指すべき社会構造としての「農的社会」を、読み解かなければならない。

ここでいう「農」と「農業」は重なる部分はあるが、まったく違う意図を含んでいる。「農業」はその土台となる土地や自然、環境といった基盤があって、さらに「農」というコミュニティや文化の上に成り立っている。現在、多くの識者や論者が、農業政策としての農業問題を考えるとき、このコミュニティや文化といった「農的社会」の認識がまったく抜け落ちてしまっている。そこで著者が指摘したのは、農業という産業が農的社会の存在と持続を土台として成立し、その視点が新しい時代の農業に必要不可欠だということである。その眼差しをひらくことを意識して、あえて「農的社会をひらく」という強い表現になったのである。

農業問題を考える時に、経済面を優先してきたその認識を改めれば、実際に即した問題解決の糸口となる。「産業としての農業は、食料供給のためになくてはな

らない貴重なものであるが、農は産業から切り離されてしまった様々な要素をも包摂している、それだけに農の世界を一言で語ることは難しいが、強いて言えば生命原理を最優先した世界、ということができるかもしれない。」

本書では、農的社会到来がなぜ必然的なのか、また「農」を再評価することが世界の潮流であるのかが明解に示される。これまでわが国にとっての農業モデルは欧米型農業であり、先進国型農業であったが、その原理ともいえる経済至上主義、新自由主義の加速によって様々な問題が引き起こされてきた。経済至上主義の最も本質的な問題は、農業においては「コミュニティの分断と喪失とともに、贈与の世界の喪失である」と指摘している。「もはや欧米型や先進国型の農業をモデルにして追随するのではなく、あらためて時代の変化に対応した日本型農業を確立していくべき時がきている。」とし、そのポイントに「多様な担い手が大小相補して多様な農業を展開する地域農業である。」ことと「第2のポイントが、コミュニティ農業であり、人と人の関係性、すなわち生産者と消費者、都市と農村の関係性を大事にしていく。」ことをあげている。

葛谷さんは日本型農業の具体的な形として、地域農業やコミュニティ農業を謳っている。本書での葛谷さんの立場は国民皆農論者であるが、その論では、人と農の関わり程度において、人口と農地面積は反比例し、多様な担い手には数に比例した多様性を認めることである。「中核農家に加えて中小零細農家、定年帰農者等アマチュア農業者も含めた多様な担い手によって、自然・風土を生かしTPPをはじめとする農産物自由化の流れの中での生き残りを可能とする。」のである。

いうまでもなく、本の内容は葛谷さんの過去の研究成果を土台としている。その具体的で示唆に富む内容は、本書後半の取り組み事例で明らかにされ、また、理想の形を足下から作っていく有効な目標設定とヒントが詳説されている。本書には発想を逆転させることで問題を強みに変える、様々なアイデアが溢れている。一部を抜き出すと、「グローバル化には、地域農業によるローカル化で対抗していく」、「従来の農業問題や人口減少による過疎化の問題を、逆に特徴として生かす道を探る」、「国内における辺境、つまり農山村にこそ、日本農業を変革する胎動が芽生えつつある。」あるいは、「中山間地域こそが小規模・分散性という“弱み”を逆手にとり、残された文化・伝承等も含め地域特性を生かした農業を展開する」などがある。

特に押し寄せるグローバル化の力、経済至上主義の無機質な力を、命ある有機農業の力に転換するように、葛谷さんの主張には、現在の「農業」が抱える問題と、一方で「農」がもつ豊かな可能性を明らかにしながら、有機農業がつくる農的社会の力を遺憾なく発揮することで人間を幸せにする社会がひらかれるという期待がある。「生命原理を重視した社会は、地域を基本とし、地域主導により形成された地域社会がネットワークでつながれた分散型の社会となる。」「足元からの自立と協同が共生を可能にし、戦争や原発等による脅威をも排除することにつながり、未来への途を開き、パトタッチを可能にする。」これまでの様々な現状分析の上に立って、これからの未来を指向する葛谷さんの論説は、農的社会をひらくきっかけを与えてくれる。その実感を得ることができる。具体的かつ明確な論点にそって書かれたこの本の一読をおすすめして、論評を閉じたい。

【書評】

谷口吉光 著

『「地域の食」を守り育てる』

(無明舎, 2017年, 254頁)

高橋太一

Taichi TAKAHASHI

農業・食品産業技術総合研究機構
中央農業研究センター

本書の副題は“秋田発地産地消運動の20年”である。著者は、自身のことを「社会学者であり市民運動家だ」(p246)と述べている。社会学者として発見した、秋田県における食と農の様々な問題について「地産地消」を共通軸として捉え、それら問題への一つの回答を市民運動家としての行動で示し、その経過をまとめ「熱く」語ったものがこの一冊である。

内容は20年の活動の歴史を述べたものであり多岐に亘っている。第一章「チサンチショウ」ってどう書くんですか？第二章「食と農のNPO」目指して、第三章 秋田発 食と農をつなぐ仕組み作り、第四章 地産地消の思いを次世代に受け継ぐ、第五章 会員の活動から、という各章タイトルからもそれは容易に見取れる。

第一章は、地産地消という言葉が一般の人々の理解から遠く、「チサンチショウ」とは何かを問いかけら